

ある僧侶のライフヒストリー
——死に寄り添うボランティア——

栗原 理

1. 目的

本研究の目的は、死を受容する現代日本人の営みがどのようなものであるのかを明らかにすることにある。個人が死を受け入れるプロセスは多様である。またそのプロセスは自己の死か他者の死かによっても、大きく異なる。ここではある事例に着目し、重要な他者の死を長い年月をかけて受容するプロセスのなかから、個人の記憶と経験が次第に同様な苦しみのなかに生きる他者への共感と支援へと発展していくプロセスに着目する。そこからは、必ずしも制度化されることのない死の受容過程が、特定の人生の記憶や経験をつうじて、特定の行為パターンとなって社会に広く還元されていることがわかる。特定の事例を通じてその道筋を明らかにすることにより、すべての個人が避けて通ることのできない死の受容という問題に、非制度的支援の可能性を探ろうとするのが本研究の目的である。

2. 方法

本報告では、ある教員が仏門に入り僧侶になるまでのライフヒストリーに着目する。もと高等学校教員であった彼の人生遍歴のなかで、父親の死を病院で見守ったその経験から、人びとの生と死にまつわる本人およびその近親者の悲哀と克己を「共に経験し受容する」僧侶としての職業行為へと転進していくプロセスをみていく。また非職業行為としてボランティアに本人およびその家族や近い人の死に寄り添うボランティア行為者の存在にも目を向ける。近親者と同様にボランティアである彼らと「専門職」とされる施設や病院のスタッフとの相互作用のなかには、すでに確立されていた「専門職」としての規範が揺らぎを見せる瞬間が存在している。その事実についても、行為者の意味世界と制度化した職業規範や行為との連関という視座から考察する。

3. 結果

制度化された職業行為として住職という社会的地位と役割が確立されている一方で、人びとが死と寄り添う営みは、きわめて個人的なものがある。それは個人の人生遍歴のなかにおいて蓄積されている「死の受容の経験」の積み重ねであり、蓄積され研ぎ澄まされていくプロセスでもある。一個人として近親者の死を受容する過程は、同じ苦しみと向き合う他者への精神的支援へと発展する場合もある。時にはボランティアとして、また稀には職業的に継続してかかわっていく事例がそこには存在している。

4. 結論

近親者の死を受容するプロセスにおいては、施設や病院、寺院という制度化された機関や組織体はもとより、そこに入り出る行為者の非制度的な支援の一つひとつには大きな意味がある。そうした行為者が容易に施設や病院に入り出ることができる仕組みを創ることは重要である。これまで目を向けられてきた国家誘導型の病院ボランティア組織とは別の形の、行政によって道筋をつけられ動員されるボランティアとは異なるボランティア行為者の可能性に、もっと目を向ける必要がある。